

指導者（保護者）として大切にしたいこと（その33）

～「誰かのせいにするな！！」～

2021年11月吉日
U12部会広島地区SV
大庭 浩資

広島県バスケットボール協会U12部会広島地区の保護者の皆様、指導者の皆様、役員の皆様、いつもお世話になっております。

後期リーグ戦も会場や試合時間が二転三転する中なんとか終了しました。調整をしてくださった役員や関係者の皆様、本当にありがとうございました。

これから広島地区予選を迎えますが、新型コロナウイルス感染が完全に終息したわけではありません。拡大防止のため、またこの先、いろいろな大会が無事開催されるためにも、今後も「新しい生活様式」（マスクの着用、咳エチケットや手洗い、3密を避けるなどの対策）をより一層徹底しなければなりません。

話は変わりますが、日本のプロ野球も優勝チームが決まりました。

優勝したセリーグのヤクルト、パリーグのオリックスともに、昨年度は最下位でした。誰がこの両球団を、今年の優勝チームと予想したのでしょうか。

これから見ても、プロ野球の世界はどの球団も選手の実力は紙一重。後はいかにその個々の力をチームの勝利のために発揮できるかにかかっているのでしょう。

我がカープはというと、残念ながら4位でした。リーグトップのチーム打率を誇りながら、総得点はリーグ5位。大瀬良、森下、九里の3本柱に加え、押さえの栗林が活躍したにもかかわらず、やはり投打のかみ合わせが悪かったようです。

でも、小園、坂倉、林などの若手が着実に成長し、佐々岡監督の続投も決まったので、来年度こそ、リーグ制覇を果たしてほしいものです。（鈴木誠也の大リーグ挑戦の情報が気になりますが・・・）

またこの時期は、大きな夢を持ち新しくプロ野球の世界に入ってくる選手もいれば、引退したり戦力外通告を受けたりする選手や監督がいる時期です。

ソフトバンクホークスの工藤公康監督は、在籍7年間で、3度のリーグ優勝と5度の日本一を勝ち取りました。その工藤監督でさえ、今シーズンはBクラスに終わった責任をとり退任しました。「やはり敗戦の責は将が負うもの。チームが再スタートするという意味でも、そこは責任を持ってすべき」という潔さです。

引退試合や引退セレモニーをしてもらおう選手がいる一方で、報道されることなく、静かにこの世界を去っていく選手がいるのも、勝負の世界の宿命ですね。

さて、今回のテーマは「誰かのせいにするな」としました。

人間は強いようで弱いもの。何かの困難に直面したり、物事がうまくいかなかったりすると、ついつい誰か（何か）のせいにしてしまいがちです。

誤解があってはいけないので、具体的な例は書きませんが、私自身を振り返ってみても、なかなか試合で勝てないことを、選手のせいにしてたり、練習時間不足のせいにしてたりと、この歳になっても恥ずかしい限りです（実は指導力が不足しているのが一番の原因なのに・・・ 工藤監督と同じように責を負う時期も目の前のようです）。

そこで今回、今年限りで現役を引退する阪神タイガースの岩田稔投手についての話を取り上げてみました。岩田選手といってもなかなかピンとこない人も多いでしょうが、病気を抱えながらも黙々と投げ続ける姿は、私は大好きでした。なぜあそこまで頑

張れるのかと思ったことがありましたが、今回の談話でその理由がよく分かりました。

お父さんの「誰かのせいにするな！！」からスタートした野球人生は、私たちに「誰かのせいにするのではなく、まずは自分自身のことを振り返り、自分が努力することが大切なのだ」ということを教えてくれるような気がします。

心をズタズタにされた夏からもう20年が過ぎた。

「う～ん・・・やっぱり今でも嫌な思い出になるかな。1型糖尿病で差別を受けたわけやから。でも、あの一件がなかったら、もし病気になっていなかったら、絶対ここまで長く野球を続けられなかったと思う」。

岩田稔は今、父の広美さんと交わした約束を少なからず感謝している。

「内定が取り消された」大阪桐蔭の西谷浩一監督から告げられたのは高校3年8月のことだった。高校2年の冬に発症した1型糖尿病が原因で、社会人強豪チームへの進路が白紙に。「そんなん、おかしいでしょ！」。荒れに荒れた17歳を諭してくれたのは厳格な父だった。

「誰かのせいにするな！！ おまえ、絶対に恨んだらあかんぞ。逆の立場だったら病気の人を雇うか？ だから恨むな。その代わり、いつかその会社に『岩田を取っておけば良かった』と思わせてやるんや」。

この一言に背中を押されていなければ、阪神岩田稔の16年間は存在しなかったかもしれない。

「1型糖尿病でも、頑張ればなんでもできる。少しでも偏見をなくしたい」。

関大を経てプロ入り後、背番号21はグラウンド内外で反骨心を力に変えてきた。マウンドで腕を振るだけでなく、同病の啓発活動も継続。知名度が高まると、日常からも病気へのイメージを変えにかかった。

「別に悪いことをしているわけじゃないのに、トイレでコソコソ注射するようなみじめな思いを、子どもたちにさせたくないから」。

飲食店では食事前、あえて人目に触れる席でインスリンの注射を打った。好奇心の目を向けられれば、「これを打たな死んでまうんで」と赤の他人にも理解を求めた。

「病気の人には騒いだらあかんっていう印象もあるけど、やりたいことをみんな楽しんでほしいから」。ありのままの姿で世間に訴えかけ続けた16年間。その意義はあまりにも大きい。

現役引退を決断後、09年WBCで投手コーチとして指導を受けた中日与田監督に連絡を入れると、心に染みる言葉が返ってきた。

「野球教室に教えに行ったら、『阪神岩田選手と同じ病気です』と胸を張る子どもが結構いるんだ。おまえがやってきたことは本当にすごいことだよ」。

1型糖尿病患者の元巨人ガリクソンに勇気をもたらした17歳はその後、入団会見時の宣言通り「患者の希望の星」に立場を変えた。

「少しは患者さんたちの力になれたかな。内定取り消しか。あの“事件”も頑張るきっかけになったよな」。

全力で走り抜いた充実感は、苦々しい記憶さえも優しく塗り替えてくれそうだ。